TSUUZAKI MUTSUMI
KYOTO ARTWALKS

text:TSUUZAKI MUTSUMI photo:ODA MASAKI artdirection:TANIMOTO TAKASHI

絽紗の着物、帯揚げ、帯締めは昭和初期、半襟は昭和30年代のもの。通崎所有。帯は、通崎さんがプロデュースするゆかたブランド「メテユンデ」(川島織物)戸矢崎満雄デザイン半幅帯「市松にボタン」

撮影／小田雅樹　AD／谷本天志　着つけ／大西典子　ヘア／THE FACE MAKE'S OFFICE　モデル／四方佑香

写真右／宮脇賣扇庵●1823年創業の京扇子の老舗。伝統的な町家建築をいまに伝える店のたたずまい、鉄斎、栖鳳、直入らによる京都府指定文化財の天井絵など、店そのものが美術館を思わせる。京都市中京区六角通富小路西入 ☎075-221-0181

扇面は吉事や祝事のモチーフ。新年の食卓にもふさわしい。扇の抜き型(大)¥1,365、(小)¥1,050　ともに有次

宮脇賣扇庵の投扇興。箱枕の絵柄はポピュラーな菊のほか、うさぎ、松、熨斗など27種類。一般にはお正月遊びとして親しまれているが、四季折々、季節の風物を愛でながら楽しむ。箱、扇、蝶、点数票のセットで¥36,750

土田麦僊の木版画扇子
通崎所有

通崎睦美の KYOTO アート散歩

宮脇賣扇庵・投扇興 1

Miyawakibaisenan Tohsenkyo

子供の頃、扇子を広げて遊んでいると、必ず叱られた。「お扇子は大切にしないといけません」と。その理由は、竹と紙で作られたものゆえ壊れやすい、そして扇子は末広がりで縁起の良い物だから。しかしそれだけではなく、扇は神聖なもの、というニュアンスが含まれていたように思う。

日本人の多くは、扇子に対してなんらかそういう気持ちを持っているのではないだろうか。平安時代に京都で作られた扇子は、その昔から、様々な芸能の場でも使われている。芸能の多くが宗教的な儀式や儀礼に根源を持つことを考えると、そういう感覚は自然なことなのかもしれない。

また実際、儀式の場では、扇子を前に置いて挨拶をする。この習慣は、刀を腰に差していた時代に遡る。敵に斬りつけられても、扇子の竹の部分で刀を受け止め身を守ることができたから、扇子は大切な保身具。だから、それを自らの手から離して、相手に接することは、敵意がないことの表現でもある。またお茶席で、前に置かれた扇子は敷居としての役目も果たし、扇子を境に一歩へりくだって相手に向かうという敬意や気配りを表現する役割も担っている。

そんな象徴的な使い方がある一方、扇子は夏に涼をとる実用的な「道具」でもある。その道具に様々な絵がほどこされ、持つ人のアクセサリー的要素にもなり、さらには床の間の飾りとしても使われる。この扇面画にも歴史があり、桃山時代の俵屋宗達を始め、現代でも多くの画家が好んで扇面に描いている。

ところで、数年前、昭和初期のものと思しき投扇興のセットを骨董屋さんで見つけ、お正月の飾りにちょうどいいかと手に入れた。神聖なはずの扇を投げて的に当て、点数を競って遊ぶ。この遊びを知った時は正直驚いた。投扇興、季語でいえば確かに「新年」なのだが、添えられた説明書きの最後には「春の花の宴にも、夏のよもぎふにも、秋の紅葉の賀にも、冬のあずま屋にも、夢の浮橋ならぬ厚き御引立ての程ひとへに、おたのみ致します」とある。その平安王朝的雅(みやび)なイメージがお正月を思わせるが、実は、一年中楽しめるお遊び、というわけだ。これには、地方によってもいろんな流派があり、その遊び方には多くの種類がある。

こんな遊びが根付いていたというのは、扇子が日本人の生活の中にあった証拠であると同時に、扇子の懐の深さなのかもしれない。

ちなみに、私が手に入れた古い投扇興は、京都の老舗「宮脇賣扇庵」のもの。お店では、今もほとんど姿を変えずに同じ物が販売されている。

通崎睦美(つうざきむつみ)　マリンバ奏者
京都市生まれ。5歳よりマリンバを始め1992年京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。1991年のデビューコンサート以降、自身でコンサートをプロデュースし、その新しい取り組みで数々の賞も受賞。近年はアンティーク着物の着こなしが話題となり、着物ブランドの企画やエッセイストとしても活躍。